

大学におけるインクルーシブ教育の展望と課題： 障害のある聴講生との創造的コミュニケーション教育実践から学ぶこと

著者	加納 恵子, 山崎 秀子
雑誌名	関西大学人権問題研究室紀要
巻	65
ページ	297-326
発行年	2013-03-31
その他のタイトル	A challenge of the inclusive education practice at the university : Through the action research review of the creative communication process of a disabled auditor's inclusive campus life at Kansai University
URL	http://hdl.handle.net/10112/7991

大学におけるインクルーシブ教育の展望と課題

— 障害のある聴講生との創造的コミュニケーション
教育実践から学ぶこと —

加 納 恵 子
山 崎 秀 子

はじめに

2011年5月時点の日本学生支援機構の調査によると、大学や短大、高等専門学校に在籍する学生のうち、心身に障害のある人は10236人で、2005年の2倍に増加した。わずか6年間で倍増は高等教育部門における環境整備が大いに進展した証左と評価できる。しかしながら、学生全体に占める障害のある学生の割合は、わずか0.32%で、約10%を占める米国に比べて、はるかに少ない¹。

さて、本学も2012年（今年度）、教育推進部のイニシャティブで「障がいのある学生に対する修学支援」の制度ができ、修学支援チームが発足した。社会福祉士、精神保健福祉士の専属コーディネーターを配置する本格的な取り組みである。

本稿においては、こうした関西大学の整備状況と偶然ではあるが同期したある聴講生Kさんのキャンパスライフ物語を記述し、教育実践事例としてプロセス分析することで、大学におけるインクルーシブ教育の可能性と課題を議論したい。

1 毎日新聞「障害者の進学；進むか 遅れる大学の対応、試験でパソコン使用に壁」
東京朝刊 2012年5月29日。

医学的には最重度といわれる一人の障害女性が小学校から高校まで普通学校で学生生活を送り、その延長線上に同世代との自然な学びの場を求めて関西大学の門を叩いた。マンモス大学でのインクルーシブなキャンパスライフの構築は想像以上にバリアフルであったが、それを承知で果敢に挑戦した聴講生の5年間の物語である。彼女と彼女のパーソナルアシスタント²である山崎秀子さん（共同執筆者）の「創造的コミュニケーション実践」は、関西大学における多くの学生や教職員をそのインクルーシブな教育に巻き込んでいった。

筆者も巻き込まれた一人であるが、彼女たちの企てが、単なる福祉的ケアや統合教育の大学版という所与のストーリーを超えて、知の創造的営みが許される大学ならではの「創造的コミュニケーション戦略³」と称する教育実践に展開していった。こんな興味深い実践に出会えたことに心から感謝したい。

I. Kさんのインクルーシブな関大ライフのプロセス分析

まず、聴講生Kさんの関西大学での5年間をプロセス事例として下記の時期区分に沿って分析を加えながら高等教育におけるインクルーシブ教育の可能性を探っていくことにする。手始めに、事例の展開をダイナミックに把握するためにインシデントを詳細に記録した年表を作成した。これにより、時間軸に沿って活動の展開を視覚化でき空間的な広がりも検証することができた。（末尾の年表を参照）

しかしながら、本事例は偶発的な要素が多く「教育実践」としての計画

-
- 2 日本においては、パーソナルアシスタントという制度は札幌市が先駆的に取り組んでいる制度であるが、Yさんのコミットメントは「ヘルパー機能」をはるかに超えた実質的には、パーソナルアシスタントの機能を果たすものであるとの判断から、本稿ではこの用語を使用する。
 - 3 福島智「盲ろう者と障害学—「創造的コミュニケーション戦略」の構想」大阪人権博物館編『障害学の現在』2002年 p.83-109参照。

性や検証性に乏しいこと、また正規学生ではない聴講生という制約など支援事例としても不十分な面が多々あることを最初に断っておかねばならない。それでも、単なる「楽しい思い出」として収めるにはもったいない質的な展開があった。そこで、私たちはこの営みを制度的な教育サービスの評価とは違ったボランティアな開発的教育実践として捉え、記述し資料として残すことにしたのである。

本事例は、本人Kさんと共同執筆者2人の計3人で4回程度検討会を持ち、時期区分や分析枠組みの検討を行なった。事例報告を山崎が担当し、スーパービジョンを加納が担当し、作業の全部を本人のKさんに見届けてもらった。なお、事例研究の倫理的配慮事項として、研究成果の公表を前提に、全面的にKさんとその家族、共同執筆者であるヘルパーの山崎（以下Yと記す）をはじめとする支援関係者、そして加納ゼミ生の実名表記の承諾を得ている。しかしながら、研究論文の性質上、実名ではなくイニシャル表記にとどめることとし、個人情報保護の観点から必要に応じて事実と反しない程度に適切な加工を加えている。

Ⅱ. 時期区分

1. 適応期（大学受験体制）—— 大学進学をめざして、聴講へ ——

Kさんは高校4年生の夏に、大学受験を決意した。声は出るが言葉が出ない（しゃべれない）ため、表情やうなづきで意思を表している。特に当時は、はっきりしたうなづきが少なく、表情（笑顔）で好き・OK/いや・NOを周りが感じとって、行動していることが多かった。

① 受験の経緯 —— 受験の権利を行使する ——

大学受験に至った経緯は、ひよんなことからだ。教室と同じ階にある進路指導室の前にたくさんの入試情報が置いてある。進路を考えなければならぬ時期に、進路指導室の前を通った時、加配のKさん担当教師であっ

たYが「大学」「進路」について話しかけた。そして、Kさんとのやりとりで関心を示していると受け止めたYが、大学案内の冊子をかばんに入れ、Kさんが自宅に持ち帰った。それを契機に保護者と高校が相談を開始する。Kさんの保護者は障害児・者支援の仕事や活動に携わっている関係で障害者の進学情報に明るく「大学入試センター試験」にチャレンジすることになった。出願までに準備期間がひと月（9月）ほどしかなく、その間に、どのような配慮があれば受験が可能なのかを探ることになった。Kさん本人は、夏休み中に胃ろうの手術をし、術後の経過が悪く入院が予定外に長引いた。本人は入院中での受験準備となった。

そして、翌年1月に大学入試センター試験本番が来た。パソコンを使った「配慮受験」を経て、障害者特別選抜のある大阪府立大学に出願し、2月に面接を受けた。発表は3月。わずかな希望も断ち切れ、高校を卒業。発表と卒業は同時にやってきた。入試に全力投球しており、その後のことは何も整えていなかった。急きよ、春からどうするか？ということで、大学に通いながら、大学というところを知ってKさん自身が考えていくことになる。そして、3月の半ばの時点で、聴講申し込みが可能で、電車で通えるところとして、Yが大学をリストアップし、関大に出願することになった。

② 関大聴講生作戦——キャンパスライフ支援体制づくり——

Yは、受験をアテンダントとして共にのぞみ、「ぜひ大学と一緒にいきたい！」と自ら希望した。なぜ進んで手を挙げたのか。受験からの流れとして、Yと一緒にいくというのがごく自然に思えたこと、そして何より、Kさんとの高校生活が楽しかったこと。そして、これからもKさんの受験・進学に関わっていきたいと思った。きっと、漠然とはあるが、未来に希望が見えたからではないかと思う。まずは個人契約の形で、週に1回通学サポートに入ることにした。

しかし、春学期のうちに、「重度訪問介護」の研修を受け、ヘルパー制度

の中で関わることにした。Y自身が介助のこと（技術や福祉制度）をもっと知る必要があると思ったこと、保護者との関係は良好だが、個人同士では言いたいことが言えなかったり、しんどくなることがあるのではないかと考えた。研修後は、ヘルパー派遣事業所に登録し、「登録ヘルパー」としてサポートにつくことにした。現在も、登録ヘルパーとして動いている時間、ヘルパー以外で関わる時間がある。たとえば、大学や友人、ヘルパーたちとの連絡調整、レジュメ・ニュース作成などは、「チームかなこ」メンバーとしての活動（ボランティア）である。Yは、すべてが仕事でなくてもいい、仕事があって、その上で「できる人ができることをする」世の中になればと思っている。Kさんとの関わりでも、仕事の時間と、それ以外の両側面で関係をもっている。

③ 夜型から朝型の生活へ

聴講科目は、出願までの時間がなかったのも、エイヤ！と決めるしかなかった。Y自身が社会学部の出身で、地の利もイメージもつきやすい同学部のシラバスを精査した。Yの恩師にも相談をし、Kさんの聴講を受け入れてもらいやすいと思われる福祉系の科目聴講に決めた。しかし、難題が。それらの授業が1限目（9時から）で、一般の学生でも出席しにくい時間である。が思い切って出願。その上で、Kさんの通学生生活を何とか支えるべく、ヘルパー派遣事業所が協力し、朝の通学体制を取った。7時過ぎには家を出なければならない。本人の意思決定のもと、家族、ヘルパーが一体となって、関大聴講生活がスタートした。

具体的には、前夜に泊まりのヘルパーが入り、朝のヘルパーに引き継いで通学する。定時制高校に4年間通っていたKさんが、朝型の生活に切り替えることは身体的にも大きな負担であったと思う。

また当時は、阪急「関大前」駅にエレベータが設置されておらず、行きは2駅先の「南千里」駅でホームを乗り換えて、戻ってきた（「関大前」駅

片側のホームにはスロープがあった)。そのため、今よりも通学に30分近く時間がかかった。「関大前」駅の階段を人手で上り下り、という案もあったが、降りて登っての2階分の介助が必要。さらに、混み合うホームでは危険なので、ヘルパーコーディネーターと相談をして、「関大前」駅下車はあきらめた。この年の春は雨が多く、初日も雨、翌週も雨……。毎週、雨ガッパでの登校。初日の登校時、休憩室の前で、学生課の職員さんが待っていてくださっていた。ありがたかった。

【分析】

Kさんが関大聴講生にたどり着くまでの第1期は、障害のある学生にとっては「進学」という大きな壁に体当たりをするかのような取り組みである。それでも「大学入試センター試験」に配慮受験があることなどはまだあまり知られていないから、アクションを起こす際の情報収集は重要である。

今や身体障害については大学受験のバリアはほとんど解消されたといわれるが、Kさんのようにコミュニケーションに障害があり知的障害を伴うと想定される場合「大学」を発想することさえ稀なことといえる。本事例では、「本人の最善の権利の実現」という広く長期的な観点を家族や支援者で共有できたことが果敢に大学の門をたたくことにつながったと思われる。その前提には、小～高校まで「インクルーシブ教育」を先取りした形で普通学校に通いよき統合教育実践を享受したという実績があった。言い換えると、この段階で特別支援学校卒業後の進路はほとんどが作業所やデイセンターという福祉領域のサービスに包摂（回収）されているのが現状である。それは、必ずしも悪いことではないが、オルタナティブな選択肢が少なすぎることは問題であろう。ちなみに、「知的障害を伴う」との想定については、5年間の関わりのなかで本当にそうなのかと疑わしくなることがよくあった。

つまり、Kさんの内的世界については適切に表現するツールを開発できていないので把握出来ないだけではないかということである。実際、白田

輝君のように、ツールの開発によって豊かな言葉の世界が発見され、16歳という年齢や全身性障害という重症心身障害児というカテゴリーに邪魔されて、彼の高い精神性や思索を認識できなかったという事例が報告されている⁴。筆者は、この記事を読んだ時、Kさんに同種の間感を持った。彼女は、明らかに全身で自らの意思を表現し周りの私達にサインを送り続けている。こっちも全身全霊で受け止めなければ……と覚悟をした。

2. 模索期（基盤固め期）—— 2者関係に完結しないケア実践 ——

① 黒子じゃない介助

介助者は「黒子」ではないとYは言う。本人の意思によって介助する、そんなことは当然だ。しかし、介助者はそこに存在するのであって、その場にはいないことにはできない。本人と介助者との関係、周りの人にとってその存在は消せない、とYは考えている。身体障害の方には、それは違うと言われるかもしれないが。特に、本人が話せない（言葉が出ない）場合、黒子ではなく「共に」周囲との関係を作っていく。本人に知的障害がある場合、周りの人とのやり取りによって、さまざまことを決定していくのだと思うようになってきた。

実際、Kさんとの外出は、思いのほか「外」（地域）を感じるスタートだった。高校生活、週3日×4年間、一緒に学んできたが、「外」に出るのは年に数回の行事のみ。学校内はいかに安全か、を実感しながらの通学だった。Kさんも朝早い遠出の通学、私も不慣れでヒヤヒヤする介助が多かっただろうと思う。

② 創造的介助関係 —— KさんとY ——

Yは、Kさんとまず「1対1の関係」を創っていくことに努力した。こ

4 朝日新聞「信じてほくの言葉：重い障害の少年が伝えたかったこと」2012.10.3（水）朝刊。

れほどに、顔を見て、声を聴こうとして、人に関わったことはこれまでの人生になかった。ある種、恋愛に似ているのかもしれない。相手のことを考えて、あーでもない、こーでもないと考える。介助職の人は、日々こうやって過ごしている、それも何人もの利用者に対して。これはヘルパー歴の浅いYにとっては賞賛に値することだ。Yも必死で工夫した。

しかし、Yが1人で何でも担うには、時間的にも質的にも限界がある。Kさんが自分の思いを伝えて、周りとのコミュニケーションを十分とったり、そもそもKさんが自分の思いを熟考することができる情報提供や会話が必要なのである。また、Kさんが自分の意思を周りに伝えたいときに丁寧につないでいくサポートが求められている。このようなサポートができるように、サポートする側がアンテナの精度を上げまたそのサポートが持続可能となるシステムを作りたいと思ってきた。自分ひとりですれば楽で気持ちいいかもしれない。実際、熱心なケアと認めてもらえる。しかし、Yしかできないことでは、Kさんのサポートが持続されないし広がらない。それゆえ、Kさんへのケアの工夫はいつも誰かと共有するように心がけてきた。その共有作業には大きな時間と労力があることも事実であるがこの発想が後日活きてくる。

③ つながれない——苦戦続きのゲリラ作戦——

どうすれば「つながる」ことができるか、これは高校でのサポート時から常に考えてきた。定時制高校は人数も少なく、人間関係が苦手な生徒も多い。放っておいたら、Kさんは誰とも口を聞かずに1日が終わる。つまり、Kさんだけではなく、他の子もそうなる場合がある。休み時間のおしゃべり、YがKさんに話しかけていると、その話を他の子も聞いていることがわかってきた。1対1のやり取りに見えても、実はそれを見ている人、見守っている人がいる、それは2人だけの関係ではない。そこから3人に増える可能性をもっている。Kさんは自分で車椅子を操作して動いたり、声を出して人を呼んだりできない。まずは、対面するところまで、話にな

るところまでをつなぐ支援が必要になる。そうしなければ、Kさんは誰ともおしゃべりができない。

関西大学は大きな大学で、人はいっぱいいるものの、なかなか学生とつながることができなかった。「授業後に」声をかけてみよう、と思っても、それぞれが次の授業やサークルに散っていく。お昼を食べるときに、チャンスがあれば近くの人に話しかけるくらいしかできなかった。隅っこの席が空いているテーブルに近づき、「ここいいですか？」と学生に声をかける。残念ながら、全部席を空けて移ってしまうことがたびたびあった。大きなテーブルの1画だけ座ればいいのだが。実は、わざと学生と関われそうな大きなテーブルをみつくろって、声をかけていた。授業の教室でも、車椅子で介助者を伴って入っていけば目立っているはずだが、まったく目に入れない学生が多かった。すぐそばにいるのに、こちらを見ない。学生たちは携帯世代で周りより手元、そして余計なかかわりは持ちたくないという雰囲気を感じた。

こうしたゲリラ作戦は難航した。また、夜型から朝型になったKさんの体調が整わず、1、2年目は食堂や教室で吐いてしまうことも多々あった。朝早い生活への体への負担に加えて、初めての大きな関大のキャンパスライフに緊張していた。そして何より、この苦戦を肌で感じ取っていたのではないかと今になって思う。

聴講2年目。春学期の授業で、社会学部とは別に一般教育科目の「共生社会とライフデザイン」を取る。学舎は、休憩室のある社会学部から遠い、新校舎。しかし、授業内容はKさんが日々関わる福祉領域。今回こそは、先生、授業内容とうまく関わり、学生とつながりたいとのぞんだが、担当教員が多忙な時期でまったく関わりを持つことができなかった。事前に教員プロフィールをチェックしつながれる可能性を感じたが残念だった。このようにYの学生時代よりはるかに授業のシラバスを入念に読んで作戦を練っていた。

【考察】

Yからの事例報告を聞きながら、実に多くの試行錯誤を重ねていることが理解できた。筆者の提供科目「社会福祉概論」もゴールデンアワーであったことから受講生が400人を上回り、聴講生のKさんには「障害者の地域自立支援」の単元で、教室コミュニティにいる仲間の一人として、インタビュー形式でヘルパーさんとともに授業に参画してもらった経緯がある。その時のテーマは「コミュニケーションとは何か」、言語に依存しがちな我々のつながり方を再考し「ノンバーバル」「双方向」などの意味を深めた。

受講生のフィードバックカードには「ヘルパーさんとKさんとの丁寧な意思確認やわかろうとする姿勢、伝えようとする身体に引き込まれた」「言語表現はコミュニケーションのほんの一部分であると気が付いて新鮮だった」「正直に言うとなぜ教室にいるのかわからなかったが、説明を聞いて、Kさんが聴講生として関大に通うこと自体、今日では画期的な取り組みであり、地域自立生活の一つのフロンティア実践だと思う」など、単元の具体的な理解の深まりとともに、これまで抱いていた違和感が消えたようだ。なお、この段階ではKさんは関大で聴講をしながらも「受験体制」を継続し、本命の大阪府立大学の障害関係ゼミに参加するなど精力的に地域移行先を開拓していたともいえる。

とはいえ、この時期はいわゆる「トンネル期」である。目に見える成果はない。しかし、水面下で、Yの記述にあるように創造的な介助関係の構築作業が進展していく。つまり「K-Y関係」はコアではあるが、閉じた固定的な関係にせず、「新しい風」を吹き込む「開かれた柔軟なケア関係」の基盤を築いていたのである。

一般的に、通学介助は資源不足からやむなく母親が担う場合が多いが、この場合親密圏での作法が延長され、結局、保護的な閉じたケアになる傾向がみられる。また、ヘルパーの場合についても高齢者の介護保険業務ほどに規制が強くないにしても、食事介助や移動介助といったように業務内容は極めて限定的となる。つまり、Kさんのように重複障害によるコミュ

ニケーションに大きな困難がある場合は、現行福祉サービスでは、友達作りなどを含めた実質的なキャンパスライフ支援には対応できないのである。

こうした観点から、Yの取り組みを分析するとヘルパー機能を超えたボランティアな役割といえる。どちらかという、北欧のアドボカシー機能の強い「パーソナル・アテンダント」⁵に近い。Yの介助スタンスが、Kさんの地域自立生活の充実に向けたニーズを優先させた支援であったので、おのずと先駆的なパーソナル・アテンダント役割を果たしていったといえよう。この実践を可能にしているのは、Yの所属する子ども情報研究センターでの「子どもの権利擁護」や「インクルーシブ教育」といった理念があり方法論を身に着けていたことも大きい。いつも創造的な実践が奏功するとは限らず、むしろ危険な状態を誘引する場合も多々ある。Y本人が「慎重派」を自認しているように、医療ケアの必要な最重度のKさんのケアや生活の組み立てには専門的な高いケア技術が要求されるのである。だからといって、「安心安全」を最優先することで生活の幅を狭めては本末転倒となる。細心の注意の上に立った柔軟な対応が後述の活動展開を生むことになる。

3. 転換期（発展期）——「チームかなこ」の誕生——

① ボランティア・フェスティバル

聴講3年目。Kさんとの生活は、自分たちが何か同じことをする倍以上の時間がかかる。1日一緒にいても、あつという間に過ぎる。この年から聴講は5限目。体温調節のきかないKさんにとって、帰宅が遅くなるので冬の寒さが大丈夫かなど、関係者で相談をした。今回は、加納先生とのつながりを大事にしたいこと、かえって昼食をゆっくり取ったりできるので

5 深江由香『日本版「パーソナルアシスタント」開発～チームKにおける山崎秀子さんの働きに注目して～』関西大学社会学部社会学専攻卒業論文 2012年。ここで、深江はKを支援するYの機能をスウェーデンのパーソナルアシスタント制度をヒントに論じている。

はないか、という理由で、思い切って5限に出願した。これが後に功を奏した。

6月、学生との「継続した関係」を作るのは難しいと感じていた頃、凜風館1階で「ボランティア・フェスティバル」がおこなわれていた。昼食を終え、社会学部へ移動しようとしたところ、フェスティバルの一角が見えた。授業には遅れるかもしれないが、これは声をかけよう！と一瞬の判断。次は、どのサークル（長机がいくつか並んでいた）に声をかけるか。悩む間はなく、さっと見渡して「どんなことされているのですか？」と、あるブースの前へ行った。このフェスティバルは、あくまでボランティアをしてみよう！という学生を勧誘するためのもので、ボランティアを求めている人を探しているわけではない。

それはわかっていたので、「どんなことをされているのですか？」とまずはそのサークル「チャレンジャー」の活動を聞いた。関わりを持てるかの糸口を探す意味も大きい。そして、一通り聞いた後、「この人はKさんと言って、聴講生として関大に通っています」とKさんを紹介。「大学で過ごす中で、一緒にご飯食べたり、おしゃべりしたりすることができたらな、と思っています。お昼ごはんを一緒に食べようとか、空いている時間に行ってもいいなという人がいればぜひ」と話して、代表と連絡先を交換した。「連絡します」という言葉から、2週間くらい経ち、今回も難しいかとあきらめかけていたところ、代表Sくんからの連絡で、「サークルの活動としては難しいけど、関心もっている人がいるので明日行きます」との返事。うれしさとドキドキ感をもって、翌日を迎えた。

そして、当日のお昼。授業が空いているという数人が来てくれた。3時限目空いている人、そして入れ替わって4時限目が空いている人がやってくる。両方空いている人は5限目の授業までの午後を過ごすようになった。

しかし、もうすぐ夏休みである。せっかく仲良くなってきたのに……。そこで、みんなのおしゃべりの中で、「もうすぐ夏休みやね〜」なんて触れる。「かなちゃん、どっか行きたいなあ……」と話題にする。「みんなで

遊びに行く？」ということ誰かが提案。あとは、Yは控えて皆に話の主導権を渡す。Yは、Kさんのスケジュールを確認し、学生からの質問に答える……やっと動きが見えてきた。

② そして神戸へ

「京都」案が出て、決まりかけたが、炎天下の京都でKさんの体力がもつかどうかという理由で、行き先を考え直してもらった。そして、決まった先は神戸。

ここで、驚く出来事があった。主に計画してくれた男子学生2人が、事前に下見に行っていたのだ。さすが、ボランティアサークルの学生である。Kさんと移動するにあたってアクセス、現地を先に見ておこうと考えたそう。

振り返ると、ここから「チームかなこ」のすべてがスタートしているように思う。5年目の今年も加納ゼミの合宿でゼミ生の車に乗ることになった。学生の方から電話があり、一度シュミレーションしたいので大学に早く来ることはできますか？という内容だった。学生が自分たちで、どうしよう？どうしたらいいか？を考えていく自然なやりとりがあった。学生たちの主体的なアクションが始まり、こうなればYの「初期てこ入れ作業」は終了し「後方支援」の見守り体制に入るのである。

神戸ツアーは、時間割の関係で日頃は来ることのなかった学生も参加し、15名ほどの一行になり遠足のようだった。どうやら学生たちにとってもみんなが集まるよいイベントの機会になったようである。

この年の年末、チャレンジャーのメンバーから、受験激励の色紙が渡される。このとき、神戸で撮った写真が貼ってあった。

これが、このあとの聴講生活が変わる、大きな転機になるとは想像していなかった。そして、5限の聴講にしたことで、午後の時間がたっぷりとれ友人たちと細切れにならず過ごせた。

学生に積極的に声をかける行動から、Yは「行動力のある人」「すぐ動く

人」と思われている節があるが、実は「石橋をたたいて渡る」に近い。自分のことであれば熟考してからでないと動かないことが多い。Kさんのことでも、このような偶然の出会いで即時の判断をもとめられることが多いが、日々こんな時はどうしよう？こんなことをしてみよう！などいろいろシュミレーションしており、自分の中では「想定内」であることも多い。とはいえ、これらは脳内イメージトレーニングであって、前例のない、マニュアルのない、道なき道を歩いて行く気分だ。そんなKさんとの道行はワクワク感に満ちており悲壮感はない。Kさんの笑顔の承認さえもらえれば怖くない。まさに「創造的实践」である。

③ 「チームK」の誕生

さて、聴講1年目秋学期以降、加納の「社会福祉論」（春学期）「地域福祉論」（秋学期）にて、Kさんは「Kアワー」として発表する機会を得ている。地域で共に学び生きてきたこと、福祉とは何か、を同年代の仲間として受講生に伝えている。

1、2年目は、Y中心にヘルパーと共に授業をおこなった。3年目の秋学期から、チャレンジャーの学生たちと共に発表をした。以降、その時期に出会った学生と授業を創る取り組みをおこなっている。

Kさんとその周りに集う人たちでチームを組んで何事にも取り組む姿に、加納が「チームK」と名づけた。今や、この名称なくしては活動できないほどだ。

④ 出会い系授業 ― 「Kさんと野球部」 ―

聴講4年目のことである。野球部主将（2011年度当時）と後輩たちと、毎週授業後におしゃべりをするようになった。この時間が、Kさんと彼らの仲を深めていった。Yは4月の授業開始時から、彼ら野球部の存在には気づいていた。最初、Yから授業後に声をかけたところ、必ず帰りにKさんのところに寄って声をかけてくれるようになった。実は、何週か続いた

頃、「彼らはこの時間をどう思っているのか？」とYは思い巡らした。体育会学生なので、失礼な態度はしないだろう、Kさんが喜んでいるみたいだから帰りそびれている、困ってはいないか？しかし、冷静に考えて、彼らが早く行きたいと思えば、「練習がありますから」といくらでも言える状況だ、ましてや体育会出身の私には容易に通用する理由である。しかし、「彼にとっても、リラックスタイムになっているのではないか……最初は声をかけられたから、だったが、今は自発的に居残りおしゃべりをしているのではないか」と解釈した。Kさんの笑顔はさらに増え、表情も豊かになってきた⁶。

-
- 6 この時期の交流を野球部主将小林龍之介が関大社会学部ホームページの「学生コラム」欄に綴っているので、具体的な様子を伝えるために下記に転載することとした。

「出会い系授業 かなちゃんとボクラ」社会学専攻 小林 龍之介（加納ゼミ）

僕は、鬼のような「高校野球」の3年間を経て、大好きな野球を続けるために関大に進学した。毎日野球に明け暮れる僕は、案の定、学部の授業やクラスでは練習ばかりでクラスメートと付き合える時間も限られ、なかなか体育会系以外の友人を作ることができずにいた。3年次からの専門ゼミで少し友人の輪も広がりバリアフリー展のフィールドワークなど専門研究にも関心が出てきて少しは学生生活らしくなってきたが、それでも、すべてが野球中心に回っていた。スポーツを通しての地域活性化や地域活動としての少年野球や指導者論など、結局、僕には野球しか頭にないのである。

さて、そんな野球狂の僕が、この春ちょっといい出会いをした。「社会福祉概論」でのことだ。北村佳那子さん（以下、かなちゃん）は、聴講生の4年目とかで、僕と同学年、医学的には「最重度の障害」らしく、幼い頃に何度も生死をさまよい、医者の見立てでは「何もわからないだろう、考えることもできないだろう」という。確かに、車いすにちょこんと座っている彼女はとても小さく色白で華奢、大切にしないと壊れそうなお人形のような感じがした。まさか、そんなかなちゃんと僕がおしゃべりをするようになるとは夢にも思わなかった。出会いを作ってくれたのは、ガイドヘルパーの山崎さんで社会学部のOGで体育会ラグビー部のマネージャーをされていたことから、体育会系の僕たち野球部員に声をかけてくれたのだ。

僕は、これまで野球漬けの人生で、元気な奴ばかりに囲まれてきたので、初めは戸惑った。自分の話していることが本当に通じているのか不安だったが、回を重ねて接していくうちに、かなちゃんは僕のことをちゃんと覚えてくれ、話しかけると、いつも精いっぱい表情やうなずきで応えてくれる。僕は、言葉にはならないけれどしっかりとした意思で話してくれていると確信できた。こうして毎週、授業が終わると一時間ほどみんなでおしゃべりをして、その輪も広がってい

⑤ 社会活動も「チームK」で活発に

この頃、Kさんへの講師依頼が増えてきた。大学や団体からの依頼に、「共に学ぶ」「いのち」などについて講演している。この年は、「障害児を普通学校へ全国連絡会」全国交流集会在、大阪で開催された。Kさんは、「チームK」として「高校卒業後の進路」を発表することになった。加納先生のゼミ生でKさんに卒論協力してもらう2人、ボランティア・サークルで特に親しくなった学生をコラボレーションさせ、プレゼン内容を考え、当日発表してもらった。最重度の障害があるKさんが普通高校に通い、大学へ聴講に通い学生たちと様々に取り組んでいる事例発表は参加者に大きな衝撃をあたえた。これ以降、高校からの職員研修や人権教育の講演依頼も増えている。

ところで、Yは分野の違う学生をつなぐことも重要だと考えている。福祉を学ぶ学生、ボランティア・サークルの学生だけではなく、日ごろは福祉分野に全く縁のない学生が会おうおもしろさである。今回でいうならば、野球部員がボランティア・サークルの学生と出会い共同発表をすることで、お互いによい影響を与えあえた。Kさんを通じてネットワークが広がる。こうなると、学生は一段と自発的になる。学生がそれぞれの進路先での経験を社内で生かし、福祉を少しでも身近な問題として考えてくれればう

った。

ゴールデンウィークには、僕たちの試合（関関戦）を甲子園まで応援に来てくれ、本当に嬉しかった。後輩が駅まで迎えに行き、球場では特設の車いす席を確保して熱い応援を送ってくれた。試合は、残念ながら負けちゃったが、かなちゃんの応援は、僕らをとてても勇気づけてくれた。負けてごめんな。

先日の授業は、かなちゃんがゲストスピーカーを務める「かなこアワー」だったが、野球部の後輩たちが、インタビューをしたところ、「かなこ語」で一杯みんなに語ってくれ、受講生のみみんなもすごく温かく見守ってくれていた。

不思議な縁だが、どうやら野球部はかなちゃんとの出会いから、たくさんの力をもらっているようだ。なぜか、かなちゃんの周りには、いつも自然な笑顔が溢れていて、周りを幸せな気分にする。そして、どんなことにも逃げずに立ち向かい、一生懸命に頑張っているかなちゃんの行動力、笑顔に励まされる。出会い系授業に感謝したい。



授業後の野球部やボランティア・サークル「チャレンジャー」との交流

れしく思う。

【考察】

Yのこれまでの「支援の仕込み」は、3年目から大きく実を結ぶことになった。一般的に福祉支援としてのソーシャルワーク機能は個人と環境の両方に働きかけてニーズ充足をめざすとされる。しかし、Kさんの場合は、本人の意思やコミュニケーションの確認自体も両者の協働で探っていく「寄り添い型支援」体制が必要となる。

つまり、「K-Yケア関係」は 仮説的であるが有機的な結合を前提に周囲の環境にうまく働きかけることが可能となるのではないだろうか。Yの支援は、Kさんの視線の先を追うことで将来のネットワークを探し出し声をかける。表情を見極めながら明日への関係につなげていく。興味深いのは、そのソーシャルサポートネットワークづくりがケアマネジャー的なケアの補強に有為な人材発掘という機能的発想ではなく、実にのびのびと自由な発想で「楽しむ」「豊かな時間」「面白いことができる」といったK

さんのアドポケットに徹しているところである。これは、筆者の中の「福祉支援」の射程の狭さを再発見するよい機会となった。

4. 関大ライフ最終章 — 自立にむかって —

① 5年目 — 新たな関係づくりへ —

昨年度後半は、先述の通り友人関係が深まり、Kさんの声・表情が格段に第三者にわかるようになってきた。喜怒哀楽をはっきり表現し、相手に伝えたいことがいっぱいあるのだろうと感じる。その友人たちが今春卒業した。5年目は新たに関係を作っていく必要がある。加納ゼミには引き続き参加することになり、何人かは前年のソフトボール大会等で出会っている。が、この不連続は、サポート側として、なかなかハードルの高いことだ。サークルメンバーも、新学年になると、昨年度は空き時間のあった学生が、次は授業で出会えないということがある。

新学期が始まる前、Kさんからつながりある学生にメールを送った。Kさんが今年も聴講で火・木曜日に大学へ通うこと、時間があったらお昼・お茶をしましょう、というものだ。おかげで、新学期以降、加納ゼミ4期生との新たなつながりができ始めた。

② パーソナルアシスタント

Kさんは、今年度で大学生活を終了予定である。5年間通い続けて、次のステップへ移ろうとしている。しかし、就職先があるわけでもない。既存の枠で成り立つ生活ではない。Kさん流の自立生活のイメージを一から作り出していかなければならない。

昨年度、加納ゼミの深江友香が卒業論文にて「日本版「パーソナルアシスタント」開発～チームKにおける山崎秀子さんの働きに注目して～」を発表した。論文の中で、「YさんとKさんは私が見ている、ヘルパーさんと利用者さんという枠組みを超えていると感じた。Yさんは、ヘルパーとしてKさんの生活を考えているだけでなく、Yさん自身もKさんの望む

生活を創りあげることを楽しみにし、KさんもYさんをとっても信頼していると身近で見ていて感じ、二人は何か強い絆で結ばれていると思った」と考察された。

そもそも、他の人には自然に見えているだろう、私の動き方、役割も、既存の制度では存在しない。「ヘルパー」の領域ではない部分が多い。それがあって、Kさんの大学生活が成り立っているところがある。本人や家族の意思はもちろんのこと、ヘルパー派遣事業所との連携をしながら、大学や他者・他機関に代弁し、調整する。こうした役割をなんと称すればいいのだろう。そんな私自身も、時間の制約から、考えていてもできていないことが多い。「私だけができる！体制」は、私の自己満足度を上げるにはいいかもしれない。しかし、それでは、Kさんの生活を維持し、QOL（生活の質）の高い生活にはならない。そして、関わる私自身の自己点検、パワーアップにもならない。私だけではなく、他の人もできるようにすること。そのための環境整備を意識的におこなっている。

私の役割は、Kさんの自立生活支援システムの立ち上げである。そして、それは制度の枠をとっぱらった創造的な支援システムである。これは、KさんとチームKとの創造的コミュニケーションによって成立するだろう。他の人もできるようにすること、理解者を増やすことが重要である。

③ 情報管理のカスタマイズ

Kさんは自宅暮らしであるが、日中はヘルパーの介助で生活しているが、そのヘルパーは、日々入れ替わる。10人前後のヘルパーがシフトで入っている。人は活動が広がれば広がるほど、関係が増える。そんな中で、Kさんが交友関係を維持し、活発に活動するには、情報を整理しつつ必要がある。その手立てをカスタマイズしている。

具体的には、例えば、ブログ更新は、簡素な作業で更新できるブログを設定、マニュアルを作成、他のヘルパーに方法を伝授するといった具合である。

また、講演会活動のサポートは、講演会の時にヘルパーにひとこと話してもらうところから慣れてもらい、見学してもらい、他のヘルパーが主で講演サポートに付くときは事前準備を共にして、内容をレクチャーするなどである。

友達とのメール等については、届いたメールが誰から届いたのかがわからないことがある。大学での交友関係が広がると、メールに名前は表示されても、どこの友達がかわからないのである。そのため、かなこさんにメールを読みあげて、「返信する」に本人がうなづいても、的確な返信文章を提案できない。そのため、アドレス帳を整理して、大学（現役の友達）、大学（卒業生）などグループを設定し、最低限の関係性がわかるようにしている。このグループ分けも、当初は「ともだち」だけだったのを、「関大」を増やした。そして、関大でできた友人が卒業してからは関大（現役）と関大（卒業生）をグループ分けした。マニュアルがあるわけではないので、このように生活や状況に応じてのカスタマイズが必要だ。

翌日以降にメールが入ることがわかっていたら、ノート等に記載してヘルパーに引き継ぎする。たとえば、「関大の友達から、〇〇についてメールが入ると思うから、一緒に返信して」「関大の友達からメールが入るかもしれないので、入ったらＹまで転送して」などである）これらは、マニュアルがあるわけでもないし、指示があるわけでもない。関係性が広がっている中で、自分でどう段取りするか、整備するかを常に考えている。

このように、KさんがQOLを確保した生活を送るには、既存のヘルパー役割ではない「パーソナル・アシスタント」の必要性を実感する。本人とのやり取りはもちろんのこと、ヘルパー派遣事業所、保護者、関係者と本人のことを一緒に考え、本人の思いや権利を代弁する人があってこそ、重度重複障害のあるKさんの生活においてQOLが維持、発展できる。

言葉のないKさんが声を大にして、同年代の友達と共にいることが楽しいと、さわやかに全身で伝えている。Kさんと出会った当初は、何かお世話をしなきゃと思っていた学生たちも、一緒に過ごす中でお世話をしてい

るはずが、Kさんの存在やKさんとのやりとりに助けられていることに気づく。

そして、Kさんが人とつながる力は、小学校から地域の普通学校で育ってきた中で培ってきたものであり、つながってきた経験があつてこそ。大学での学生とのつながりがクローズアップされるが、育ちの中での素地が大事であると思う。

Ⅲ. 創造的コミュニケーション戦略からの考察

さて、私たちは、このKさんの関大聴講生としての豊かな学生生活の5年間の経験から多くのメッセージを受け止めてきた。最後に以下の三点に絞ってそのメッセージを読み解きたい。

① 創造的コミュニケーション戦略

第1に、「K-Yケア関係」の営みに再度注目してほしい。既述の通り、困難なコミュニケーション障害を何とか双方から乗り越えようとする努力は、結果として援助関係の信頼性を高め両者の関係の深まりを示した。さらに重要なのは、深まることで「二者関係」に閉じていかずに、むしろこの安定的な援助関係を基盤として社会関係を紡いでいく開いたケア関係になっていることである。福祉的に解釈すれば、Kさんは雇用や教育という制度的排除の問題に苦しんでいる当事者で、Yはその制度的変革を目指す伴走者の役割を担っているがゆえに社会というマクロなシステムに開かれた運動論モデルを実践していると見えなくもない。しかし、このケア関係の本質は、そこにあるのではなく、むしろ現実と与えられたミクロの次元で「社会関係からの排除・孤立」からみごとに逃れ出て、「K-Yケア関係」という二人三脚で創造的なソーシャルネットワークとしての「チームK」を生みだした点ではないだろうか。

このグッド・プラクティスは、偶発的に映るかもしれない。実際、定型

的な介助スタイルでは導き出せない実践で、制度的専門サービスの枠を意識的に超えた開発的実践であった。本来、専門ソーシャルワークを超えた「地域福祉実践」には、開発性が担保されているのだが、本事例においてもその開発性が具体の次元でいかになく発揮されている点は高く評価できるのではないだろうか。

もっといえば、チームKの営みは、竹内章郎の「弱者の哲学」で論究されていた「能力の共同性」という概念をも想起させる。つまり、Yは、Kさんへのケア行為によって「環境へ発信する能力」を手に入れたという解釈である。Yは、いつもはにかんで「私は元来慎重派ですし、自分のことならこんなに積極的に周囲に働きかけるタイプではありません。ただ、Kさんの顔を見てると背中を押されるように動いてしまうし、どんどん面白いアイデアがわいてくるんです。不思議ですね。」と笑う。

竹内の言を借りれば、「常識的には「能力が劣るとされ」、それゆえに、差別され抑圧される人が、今後の新しい社会や文化を創造するさいには、「きわめて重要な存在とされ」、したがって、ある観点からは「能力があるとされる」人にもなる点を強調したい……この場合の「能力があるとされる」は、確かに常識的な意味での「能力がある」ということにはならないかもしれない。「弱者の能力」は、この場合「弱者」を受容する環境、つまり介護や世話や周囲の人々の「能力」の問題に影響を与える、といった「能力」である場合が多い⁷⁾とある。

これ以上「能力論」をここで論じる紙幅はないが、2006年国連の障害者の権利条約によって普及し始めた「障害」の社会モデルという概念に引き付けて今度は「能力」の社会モデルを構想したいと思う。

② インクルーシブ教育のダイバーシティ戦略

次に視点を大学側、つまり人材養成の側に移して考察したい。これまで、

7 竹内章郎『「弱者」の哲学』 大月書店 1993年 p.12-13, 142-152。

障害のある学生の受け入れについては「人権保障」の観点から、ある意味、「譲歩」する形で進められてきたのが実際である。ところが、最近少し様子が変わってきている。社会組織の求める人材がグローバル・スタンダードを目指して変わりつつある今日、同質の似たような学生ばかりを集めて教育しても変化や危機に強い柔軟で創造的能力のある人材が育たないと経営戦略の分野で語られ始めた。

ダイバーシティ・マネジメント（Diversity Management）とは、個人や集団間に存在するさまざまな違い、すなわち「多様性」を競争優位の源泉として生かすために文化や制度、プログラムなどの組織全体を変革しようとするマネジメントアプローチのことである。主として欧米で普及しているが、たとえば、女性や少数派のみに適応を押し付けるのではなく、組織文化やすべての人々がこの変容の過程にかかわることが求められている。特に会社のトップや人事担当者は、訓練や指導を通じて積極的にダイバーシティ戦略の良さを理解しグローバル・スタンダードに通用する人材を求めたのである。

実際には人種や性別に焦点が当てられがちだが、ダイバーシティは人種・国籍・宗教・障害・性別・年齢など、あらゆる多様な要素を考慮している。つまり、もはや「日本人・男性・健常者」モデルは古いというわけである。これまでの労働者に不適合とされた「外国人・女性・障害者」の除外コードを外して、多様性の中から「有能な人材」を発掘するというリベラルな発想である。「日本人・男性・健常者」という旧来の労働市場は、「外国人・女性・障害者」においても「使える人材」を確保したいという究極の自由主義である。この経営戦略の是非はともかく、大学教育においても同質の18歳人口を対象にしては企業の求める人材養成に対応できない。つまり、今日の大学においても「多様性」を競争優位の源泉として位置づけ、教育プロセスそのものに前述の創造的コミュニケーション戦略を組み込んでおかねばならない。そのための環境整備にかかる費用などわずかな予算であろう。国も障害者制度改革の一環としてインクルーシブ教育を推進し

ている最中である。「障害者差別禁止法案」が可決されれば、「合理的配慮」義務が制度化され補助金制度も一層の整備が進むことになる。関西大学に障がいのある学生への就学支援制度が発足したのは非常にタイムリーな政策であったと評価したい。

前述のとおり K さんが加納ゼミに参加することで、ゼミ生たちがどれほど触発され、卒業研究やフィールドワークへの K さんの惜しみない協力によって研究を深めることができたかは、これまでの卒業研究レポートが雄弁に伝えてくれている。5年目の第4期生の卒業研究にも、Kさんとのフィールドワークを基礎にした作品が数多くある。もちろん、ゼミ運営に関する合理的配慮のための支援の工夫、例えば、資料のビジュアル化、時間配分……など必要とされたが、そうした配慮は結果的に学生全体の利益に帰するという意味でまさに「ユニバーサルデザイン」だったのである。

③ 「知」の冒険

最後に、大学におけるインクルーシブ教育の意義について考えたい。義務教育段階でのインクルーシブ教育への認識はずいぶんと深まってきたが、高等教育におけるそれは、排除的な「選抜試験」があることからあまり進んでいるとは言えない。前項の「ダイバーシティ戦略」においても「知的能力の高さ」は譲れない条件である。しかし、「知的能力とは何か、それをどう測るのか」という問いに改めて向き合うならば、「学力」のカバーする領域の狭さに愕然とする。現行入試制度に代わる妙案が出てこないから「測れる学力」に依存せざるを得ないともいわれる。

前述の創造的コミュニケーション戦略の項で論じた、近代以降の「能力のありか」を個人／個体に還元する「能力」の個人モデルを疑う余地もある。障害学の福島智は、9歳で失明し18歳で失聴して「盲ろう者」となり、「体の底が抜けてしまったような魂の苦悩」との格闘から画期的な「創造的コミュニケーション戦略」を構想し、現在、東京大学先端科学技術研

究センターで新たなコミュニケーション論を紡ぎだしている⁸。彼のような能力が発見され救出され発揮される「環境」の能力が整うのは稀で多くはうずもれたままである。

ここで改めて、2012年10月3日付の朝日新聞の記事を紹介しよう。

障害が重いために言葉を理解できないと考えられてきた人々も、実は言葉の世界を持っている。それを社会に伝えたいと願った少年が志半ばの16歳で亡くなった。かすかな体の動きを拾う特別のスイッチで入力された文章が残された。「せっかくいろいろなこともちが、ことばをつかっているのに しんじて」。彼の文はそう訴えかける⁹。

記事を簡単に解説すると、東京の臼田輝君は、2006年中学1年で「文字入力スイッチ」に出会ってから多くの「命のことば」とでも表したい美しい文章を残した。母は「息子が幸せだったのは文章を残せたことより、重い障害があっても、一人の人間として向き合ってくださった方々がいたこと」と述べ、支援者の柴田保之（国学院大学教授）は「重い障害で「はい」「いいえ」も言えないため、赤ちゃん程度の発達段階と見なされる人もいる。だが、多くは言葉をもっている。本当に本人の言葉なのかと疑念を持つ人もいるが、やっと表現できた喜びを感じている本人が、信じてもらえない現実には再び絶望するケースもある。意思を持ちながら認められないのは、人間としての存在を否定されること、その恐ろしさを想像してほしい。」と述べている通り、「文字入力スイッチ」という技術が開発されただけではまだ「環境」の能力は十分ではない。臼田輝君の言葉に耳を傾け心を動かす真の「共同性」という創造的な文化がなければ伝わらないのである。

この記事を読んだとき、筆者はKさんのことを即座に思い出した。Kさんには言葉があるに違いない、直接発せられないものであっても内的世界の豊かさが全身から伝わってくる。授業の反応も年々わかりやすく当意即

8 福島智『盲ろう者とノーマライゼーション』 明石書店 1997年。

9 前掲4。

妙に返してくれるようになり、今では、授業の出来ばえをKさんの表情で確認させてもらうといった具合である。ゼミでも、ある段階から「Kさんの言いたいことがわかるようになった」と何人も学生が証言している。かくして、チームKのコミュニケーション力の高まりは、多くの共同プログラムを作り出し実践されていった。

まさに彼らの「実践」によって深められた「知」は、池川清子のいう「生きられる世界の実践知（フロネーシス）¹⁰」そのものである。福祉の専門ケアに回収されない「素（アマチュアの意）」のケアの営みや思想が十分に経験されている。筆者はこのような知の学習を大学における福祉教育で復活できないものかと悩んできた。なぜなら、今日の福祉教育は「資格取得」に傾斜するあまり合理的な専門知識と技術の習得に忙しく「素」の自由な発想での福祉実践が困難になっていると感じるからである。

また、「臨床知」という言葉もある。中村雄二郎によれば、「臨床やフィールドワークという対象との身体的でかつ相互的な関係が理論そのものにとって決定的に重要でかつ本質にかかわる学問」のことだ。精神医学や文化人類学に代表されるような領域で大切にされてきた。さらに中村は「パトスの知¹¹」を提案する。「ただいわゆるパッションつまり情念だけでなく、受動、受苦、痛み、病いなど、いわば人間の弱さにかかわるものを指し、したがって『パトスの知』とは、能動の知、アクションの知である近代科学の知と正反対のものである。人間の強さを前提とする近代科学の知が蔑視してきたもの¹²」とある。

チームかなこの5年間の営みは、大学の場においてこうした「実践知」

10 池川清子『看護—生きられる世界の実践知（フロネーシス）』 ゆみる出版 1991年。

11 ちなみにパトス（pathos）は、一般的に芸術などでの情念・感情表現だけでなく、悲哀・苦痛を意味し、従ってパトスの学は、パソロジー（pathology）つまり病理学のように、人間の悲痛や苦悩を研究することで人間の本質へ迫ろうとするといわれている。

12 中村雄二郎『魔女ランダ考』同時代ライブラリー34 岩波書店 1990年 p.79。

や「臨床知」を検証するチャレンジングな「インクルーシブ教育」の取り組みだったのではないかと振り返っている。そういえば、大学とはかつて「知」の冒険が許されるようなメタ現場でもあったのだ。

おわりに

Kさんは、今春加納ゼミ4期生とともに関大を「卒業」する。これから、Kさん流の「自立生活」を模索することになる。すでに、この5年間の大学聴講生活の実績から講演依頼が増えており、Yさんとの二人三脚や家族、ゼミ生とのコラボレーションでユニークな講演活動が展開されている。しかしながら、「卒業」によって、社会とのつながりが断たれてしまうと、たちまちKさんは「在宅重度障害者」に戻り、これまで磨いてきたタレント性や蓄積された「実践知」は色あせてしまう。現在Kさんは社会への発信窓口となる拠点を求めて自宅に近い距離でのオフィス兼住居を探していると聞いた。

実際「社会とのつながり」は重要である。Kさんの体力は常に医療ケアが必要なほど脆弱であるが、火・木の授業は一度も休まなかった。そして夏休みや春休みといった長期休暇になると体調を崩したと聞く。また、大事なイベントや講演も多くなり、体調管理が心配されたが、まるでアスリートのように体調を合わせてくる能力には皆で感心し頭が下がった。このエピソードからわかるように、Kさんは、WHO（世界保健機構）の障害の定義にあるICF（International Classification of Functioning）モデルが明示した「社会参加活動が心身の健康状態をよい状態に保つ」や「個人要因だけでなく環境要因が生活機能の水準を規定する」といった「障害」の社会モデルをみごとに体現するスーパーモデルである。

今後は、「能力」の社会モデルを創造するミュージズになって、新しい地域福祉文化の創造に命を燃やしてもらいたい。私たち「チームK」は、これからもこのミュージズについていこうと思う。

Kさんの関大ライフ 年表

時期区分	年	月	学年	活動項目	内容
受験体制へのゲリラ戦	2008年	1月	高校4年生	受験	大学入試センター試験受験(1回目)
		3月	高校卒業	受験	大学不合格→聴講・科目履修生の道を探す
		4月	関大1年目	大学(聴講)	関西大学【科目等履修生】となる。社会学部 松原先生(金1)、北村先生(木1)の週2回通学
		7月		大学(聴講)	関西大学の春学期試験(特別試験の実施)
		7月		受験	「DO-ITJapan」(障害のある高校生のための体験プログラム)に参加
		9月		大学(聴講)	関西大学【聴講生】月4限(地域福祉論)、木1限(福祉臨床心理学)、金1限(ソーシャルサポート論)の週3回通学
		10月		社会発信	『かなこNEWS』発行開始
		10月	講師	社会発信	関西大学第一高校3年「情報科」
		11月		大学(聴講)	社会学部【地域福祉論】にてゲストスピーカー:1回目
		1月			成人式
		1月		受験	大学入試センター試験受験(2回目)
	4月	関大2年目	大学(聴講)	関西大学【聴講生】「異文化への理解を深める」(月2)「共生社会とライフデザイン」(木3)の週2回通学	
	5月		大学	淀川河川敷の清掃ボランティアに参加	
	6月		受験	受験をするかどうか、話しあい(ピアカウンセリング/ヘルパーコーディネーター・支援者)	
	7月		社会発信	大阪府立大学三田ゼミに初参加	
	8月		ケア	なでしこ(生活介護) 週1回通所スタート	
	8月		社会参加	初「選挙」に行く	
	9月		余暇	ラフティングツアー①	
	10月		大学(聴講)	秋学期「広告心理学」を聴講(木3)	
	10月		社会運動	デモに参加「さよなら! 障害者自立支援法 10.30全国大フォーラム」	
	11月		大学(聴講)	社会学部【地域福祉論】にてゲストスピーカー(「かなこアワー」と命名):2回目	
	12月	講師	社会発信	西成区ヒューマンライツ協会(職員研修)	
	1月		受験	大学入試センター試験受験3回目)	
	3月		社会発信	南大阪療育園での展示用に写真資料(北村佳那子の歩みを写真で綴ったもの)を作る~その後、この写真資料が活躍	
	4月	関大3年目	大学(聴講)	春学期「社会福祉概論」を聴講(木5)	
	4月		社会発信	ブログ開設	
5月		社会運動	厚生労働省、文部科学省への交渉に加わる(東京へ)		
6月		社会発信	社会学部【社会福祉概論】にてゲストスピーカー(かなこアワー):3回目		

大学におけるインクルーシブ教育の展望と課題

「承認」と開くケア	2010年	6月		学内調整／友人	関大ボランティアフェスティバルの前を偶然通りかかるサークル「チャレンジャー」との出会い
		6月		社会発信	大阪市立大学の授業で発表
		8月		学内調整／友人	関大ボランティアサークル「チャレンジャー」有志10数名と神戸へあそびに行く。
		9月		余暇	ラフティングツアー②
		10月		自立	ILP(自立生活プログラム)に参加
		9月		大学(聴講)	秋学期「地域福祉論」を聴講(木5)
		10月		受験	関大で、「チャレンジャー」の友達と受験勉強開始
		10月		自立	ILP(自立生活プログラム)に参加
		11月		大学(聴講)	社会学部【地域福祉論】にてゲストスピーカー(かなこアワー):4回目 *関大「チャレンジャー」有志と共に
		1月		受験	大学入試センター試験受験(4回目)
チームかなこの誕生	2011年	1月	講師	社会発信	頌栄短期大学
		2月	講師	社会発信	関大一中「いのちの授業」 *関大チャレンジャー有志と共に
		3月	講師	社会発信	石川県白山市
		4月	関大4年目	大学(聴講)	春学期「社会福祉概論」を聴講(木5)
		5月		余暇	甲子園に関大野球部応援
		6月		学内調整	加納ゼミ(4回生)に参加
		6月	講師	社会発信	子ども情報研究センター「人権保育・教育連続講座」
		6月		余暇	障害者カヌー「パラマウント・チャレンジ・カヌー」に初参加
		7月			社会学部【社会福祉概論】にてゲストスピーカー(かなこアワー):5回目
		7月		社会運動	文部科学省(東京)との話しあいに参加
		8月		受験	今年度受験をするかどうか相談→受験しない
		8月		自立	「自立に向けての支援者会議」スタート(隔月開催)
		9月		余暇	ラフティングツアー③
		9月		ケア	訪問看護(週1回)スタート
		9月		大学(聴講)	火曜日:加納ゼミ4回生(後期から毎週参加)／木曜日:地域福祉論
		10月		社会運動	【ゆめ風基金】街頭募金に参加
		11月		学内調整／友人	加納ゼミでソフトボール大会に参加
11月		学内調整／友人	「かなこアワー」発表の打ち合わせ		
11月		大学(聴講)	社会学部【地域福祉論】にてゲストスピーカー(かなこアワー):第6回 *関大野球部有志と共に		

社会への離陸期 「かなこ流自立へのライフデザイン」 関大Life充実期	2012年	11月		社会発信	障害児を普通学校へ全国連絡会で発表。関大学生と参加。
		12月		余暇	関大吹奏楽部 定期演奏会に学生と行く
		1月		大学	加納ゼミ卒業研究レポート発表、打ち上げに参加。学生2人が、卒論で佳那子さんを取材した内容を執筆。
		1月	講師	社会発信	兵庫県教職員組合川西支部 * 関大4回生2名もゲスト参加、佳那子さんとの出合いや学生生活を語る
		2月	会議	自立	支援者会議
		2月		社会運動	大阪市ボランティア活動振興基金に助成金申請
		3月	講師	社会発信	岡山県教職員組合美作地区(津山市)
		3月		学内調整/ 友人	関大卒業式に出席
		4月	関大5年目	大学(聴講)	今年度も、加納先生の授業を聴講出願(これまでは半期ごとに聴講出願していたが、今年度は通年で出願。)
		4月		大学(聴講)	火曜日:加納ゼミ4回生(今季も毎週参加) / 木曜日:地域福祉論
		4月	会議	自立	支援者会議
		4月		社会活動	「大阪維新の会」所属の市議を訪問
		5月		余暇	関大卒業生の親友と電話(しっかり声が出て会話する)
		5月	会議	ケア	介助者会議
		6月		自立	大阪府営住宅に応募(落選)
		6月		自立	佳那子さんの「介助者募集」チラシを学内で配る(社会学部、経済学部)
		6月		社会運動	東京・民主党院内集会へ参加
		7月		学内調整/ 友人	社会学部加納ゼミフィールドワーク(USJ)に協力
		7月		社会発信	社会学部【社会福祉概論】にてゲストスピーカー(かなこアワー) * 初の、学生と佳那子さんのみで進化した授業:7回目
		7月		学内調整/ 友人	加納ゼミフィールドワーク「パーベキュー」(淀川河川敷)に参加
		7月		大学(聴講)	社会福祉概論(試験)
		8月		学内調整/ 友人	社会学部(加納ゼミ)夏合宿「彦根荘」に参加
		9月		余暇	ラフティングツアー④* 加納ゼミの学生6人参加。
		11月		学内調整/ 友人	加納ゼミでソフトボール大会に参加(昨年に続き2回目、交流会も参加)
		11月		社会発信	「ポジティブ生活文化交流祭」(長居公園)に加納ゼミで参加
		12月		大学(聴講)	社会学部【地域福祉論】にてゲストスピーカー(かなこアワー):第8回
12月	講師	社会発信	千里金蘭大学 ※関大4回生2名もゲスト参加、佳那子さんとの出合いやフィールドワークを発表		
12月		学内調整/ 友人	社会学部(加納ゼミ)忘年会に参加		